〈特集「東西における善と悪」3〉

東西における善と悪——コメント

行安　茂

「西洋思想」

五十嵐氏は、西洋思想の主流が「善的一元論」にあると指摘され、「キリスト教を含めて西洋思想の主流は善悪対立の二元論よりも、根源もしくは究極としての善をたて、その欠如態もしくは陰影のごとき形態としての悪を認めてきたに近い」といわれる。「善のイデア」あるいは「純粋な光の一者」によって悪は善へと解消されていく。こうした「善的一元論」に対して、氏は「人間の、特に人間個人の善悪や能力や可能性をそれほど楽天的に信じてもよいものか」という疑問を投げかけ、善悪をその対立において再検討する必要がある、という。とくに、今日、「組織的悪は全員で灰色高官をやれば恐くない」という傾向が見られるために、悪の意識が問題にされなければならない、と氏はいわんとする。氏の指摘は注目に価するが、一歩進んで考えるとき、善悪をどう理解すべきか、両者の関係はどう考えられるべきかが問われてよいであろう。

善と悪との関係は以下のように考えることはできないであろうか。善は悪の意識が徹底する方向において必然的によび起こされるものである。善は、悪の中に可能性として潜在し、悪の意識がより強くなるに応じて明らかになる。この意味において、両者は平行線をたどるのではなく、表裏一体として考えられるべきものであろう。次に考えてよいことは、善と悪とは固定したものであろうか、両者は全く無関係なものとして見られるだろうか、という問題である。もしそう考えられるとすれば、普通の、いわゆる「悪い人」はどのようにして「善人」に変わることができようか。われわれは「悪人」の心の中に「善人」の可能性が宿るものとし

て両者の関係を見るのが妥当とはいえないだろうか。

善と悪とが固定したものではないという見解は、デューイの道徳論・宗教論にも見い出される。かれによれば、善は悪に、悪は善に変化するものとして見られる。なぜこういうことがいえるかといえば、人間は絶えず進歩し、成長するものとして見られるからである。善悪は、こうした自己実現の過程においては一時的な経験であるにすぎない。それらは、次の成長への一つの力として意味をもつ。こうした考え方は、善悪を固定的に考えるのでもなければ、これらを永久に相対立するものと考えるのでもない。善悪は常に流動的に見られるのであるが、この場合、見逃してはならないことは、全体としての人間形成の視点が善悪論の前提にあるということである。

「インド仏教思想における善と悪」

次に、坂部氏によれば「悪とは絶対善に相対するもの」として位置づけられ、「仏教においては、世俗から超世俗に共通する慈悲の行為が善であり、また、その反対が悪である」といわれる。そして「仏教では、世俗的生き様から超世俗的な生き様に移行することをめざす」といわれる。

では、こうした「移行」はどのようにしてなされるのであろうか。それは「戒」、「定」、「慧」の三学を実践することによって可能である。問題は、悪の生活から解脱することのできない人間においては「三学」はどのように受け入れられるのであろうか。悪の循環から自由になろうとしても、できない人間はいかにして「世俗」から「超世俗」に移行することができるであろうか。この問題に対して坂部氏はどう考えておられるのであろうか。

仏教の善悪論において考えるべき点の一つは悪がいかにして善に変わるかということを明らかにすることである。人間は、大部分、悪人であるかもしれない。そうだとすれば、かれらがいかにすれば善人に立ち帰ることができるかが問題にされなければならない。坂部氏の発表は、こうした問題に答えてはいるようにみえるけれども、善と悪とのダイナミックな関係（弁証法的関係といわれるかもしれない）の考察がやや弱いようにみえる。それは、善と悪とが相互発展的関係において考えられていないためではないか、と察せられる。もし悪の中に善の可能性を見い出す方向が積極的に示されたならば、「世俗」から「超世俗」への移行が一層よく理解されるのではないかと考えられる。

明治の思想家・綱島梁川はデューイから影響を受けた人であるが、その梁川も善悪を相互発展的関係において以下のようにいう。「善は悪に反対せんが為に来たらずして、むしろ悪の成ぜんと欲してまだ成じ得ざる根本理想を fulfil せんが為来たるにはあらざるか、悪は善に打ち勝たれんが為に存し、善は悪を全うせんが為に存するにはあらざるか。」（『梁川全集』第四巻）これは、今まで私がコメントしてきた考え方とほぼ一致する。要するに、悪は善を

実現する力を秘めており、善（理想）はこの力を引き出すものとして見られるのである。

「日本思想」

最後に、佐藤氏の「日本思想」についての発表についてコメントさせてもらう。私は日本思想については門外漢であり、コメントする資格はないけれども、氏の発表の中に、「正義論」の観点から見て注目される部分がある。レジュメの中で氏は「『悪』を、『言向け和平』す、つまり力と知と言葉によって整序するところに『善』が成就せられるといっていいであろう」と述べておられる。善はそれ自体で意味をもつのではなくて、それを可能にするもう一つの原理（正義の原理）によって規制されるものである。即ち、善は、正義の原理によって悪が規制され、秩序づけられるところに成立する。佐藤氏がこのように考えられたかどうかは十分わからないけれども、レジュメから以上のように読みとれる。私がこのようにコメントするのは、すでにお気づきの人もあると思われるが、J・ロールズの『正義論』を念頭においているのである。ロールズの'original position'と、『古事記』の理想とする国とは、東西文化の基本的な相違ということから、とうてい対比することはできないかもしれないが、正義が善に優先する根本原理であることに注目したという点において、類似した発想があるようにみえる。勿論、正義の内容は、東西において違うであろうことはいうまでもない。

佐藤氏は「『善』は、望ましい、好ましい、有益なといった意味合いを持つ名辞である。正義あるいは有徳の意味合いは薄い」といわれ、善悪を正義との対比において考えようとする。この点は、善悪論を考えるとき、大切な点であろう。氏があげられている引用文から察すると、神話に登場する神々は正義の神々であったことがうかがわれる。神々は善悪の二面をもたらすが、これは正義による秩序づけのためであったと考えられる。

以上、三氏の発表の中から私がとくに関心をもった部分を中心に、極めて不正確ながらコメントさせてもらったが、討論において問題となった点を若干とりあげさせてもらっておきたい。

まず、五十嵐氏は病気を例にあげ、健康と病気は四つの体液の混り具合によってきまる、と述べられ、イスラムにも同じ考え方があることを指摘された。氏は善悪を実体として対立的に見るのではなくて、それらを一つの連続的過程において見ようとする。この考え方は私のそれと同一である。

次に、坂部氏は「インド仏教思想」をできるだけ正確に解説しようとする意図から「絶対善」を中心に補説されたが、氏自身が善悪をどのように受けとめておられるのか、この点を積極的に打ち出されたならば、討論においてもっと問題点が明らかとなり、討論が盛り上ったのではないかと考えられる。私自身としても、

もし時間があれば、「発菩提心」の重要性や「無常感」についてさらに討論させてもらえればと思っていたところであったが、残念であった。

最後に、佐藤氏は、日本思想史において善悪を問題にすることがむずかしいのは、それらが知識の形としてというよりもむしろ自明のものとして生きているからである、といわれる。それは人間が呼吸の中で生きていながら、これを知的に論ずることが困難であるのと似ている。これは日本思想史の研究方法の困難を指摘したものとして、とくに善悪論の困難な点を指摘したものとして注目される。われわれは、この際、善とは何か、それはどう定義されるのか、こういった問題を改めて考えてみる必要がある。今回の発表ではこうした問題はとりあげられなかったが、ムア以後の英米倫理学の動向を考えるとき、善悪は言葉によってどのように表現されるか、それは何を意味するか、さらに善は正とどのような関係にあるか、といった問題を検討する必要があったであろう。

以上、三氏の発表内容および討論の問題点について十分コメントをすることはできなかったばかりか、大変失礼なことを申しあげている点も多いと思われるが、この点、門外漢のコメントとしてお許しいただきたい。

（ゆきやす・しげる、倫理学、岡山大学教授）